イスラームから考える：21世紀の現代世界

イスラームに関わるいくつかのことがら

師岡カリーマ・エルサムニー

1　日本人のイスラーム観

きょうは、「イスラームから考える」というテーマをいただきましたが、それに加えて「イスラームに関わるいくつかのことがら」という、ちょっとあいまいな副題を付けました。

というのは、「イスラームというのはどういう宗教であるか」というお話は、お聞きになる機会がいろいろあると思いますし、本などで読んでいらっしゃると思いますので、きょうは少し角度を変えて、「日本でイスラームというものを見たり考えるときに、どういう角度で見ていただきたいか」、そういった話をしていきたいのです。

そもそも、私は「イスラーム研究者」ではありません。私は東京で生まれまして、母は日本人で父親がエジプト人です。7歳まで東京で育って、日本の小学校に行きました。その後エジプトに移り、小学校5年生と6年生のときはまた日本の小学校に行って、中学生の最初の3ヵ月ぐらいは日本で過ごして、その後はずっと大学を卒業するまでエジプトです。

大学を卒業して日本に来たとき、いつかはアラブの文化・歴史、そういったものを書いたり紹介したりす

る仕事をしたいと思っていましたが、イスラームについて話したり、書いたりするのは私の仕事ではないと思っていました。ですから、私がこういう場でイスラームについて話すことになるとは夢にも思っていませんでした。そして、そういった資格があるとはいまでも思っていません。

ただ、数年前、デンマークの新聞に、預言者ムハンマドを風刺する漫画が掲載されて世界中が揺れたときがありました（２００５年）。そのカリカチュア（風刺画）問題について、私がある雑誌（季刊『アラブ』）に書いたささやかな記事（「表現の自由という原理主義」）を、白水社の方が読んで、「これは本にしましょう。これを載せるためのイスラームに関する本を書きましょう」とおっしゃったのです。その本のタイトルが『イスラームから考える』（２００８年、白水社刊）で、きょうのテーマと同じですね。この本は、私が想像していた以上に広く読んでいただき、新聞にも取り上げていただいて、いまでは「書いてよかった」と思っておりますが、そもそも私はイスラームについて話す資格がないとずっと思っていましたし、いまでもちょっと疑わしいと思っています。

信仰深く、かつリベラルだった父

このように、私はイスラーム教徒の家庭で育ったわけです。父は、啓典の「クルアーン（コーラン）」を美しい声で朗誦する人でした。子どものときから、お葬式とかお祝い事にクルアーンの朗誦をしに行って、お金をもらったりしたそうです。12歳のときにはすでに「クルアーン」をすべて暗記していました。ちなみに「クルアーン」は日本では「コーラン」ともいわれていますが、私はどちらでもよいと思っています。どちらにしろ、やはり本来の発音とは違います。

父は、その後、まず教師になり、その後で大学に行って文学者になり、日本に大学の講師として来て、私の母と出会ったわけです。

〈アリー・ハサン・エルサムニー氏は東京外国語大学などで教え、数多くのアラビア語学習者を育成するなど、アラブ・イスラーム文化に対する日本

人の理解向上に大きな貢献をした〉

父は、文学を勉強すると同時に、イスラーム法やイスラーム全般についても長く勉強して、非常に信心深く、イスラームに対する知識も非常に深いという人でした。

ウードを弾くパレスチナの男性。19世紀のスケッチ（W. M. Thomson著『The Land and the Book』第2巻、1859年刊より）

ある会議のオープニングで父がクルアーンの朗誦をしている写真があります。自分の耳に手をあてて朗唱しています。これは、音が自分に響いて聞こえるように、クルアーンを朗誦する人が必ずやるポーズです。オペラ歌手なども、リハーサルのときはよくやっていますね。この写真は日本でのことですが、イスラーム圏では会議など催しをするときは、最初にクルアーンで始めて、最後にクルアーンで閉めるという習慣があります。

父はこのようにクルアーンを非常に美しく朗誦する人でしたが、同時に音楽も好きで、ギターを弾いたり、「ウード」というアラブの楽器を弾いたりもしていました。そして、歌も歌いました。クルアーンを朗誦するプロの人を「ムクリゥ」といいますが、私たち子どもはいつも「プロのムクリゥより、パパのほうがうまい」と言いました。そのたびに父は「でも、私は兄にはかなわない」と言っていました。父のお兄さんというの

は、プロのクルアーン朗誦者でした。非常に声が美しく、聖地エルサレムでムクリゥをしていたこともあり、いまでもラジオで彼の朗誦を聞くことができるという人でした。ただ、クルアーンを詠むと同時に、人生をこよなく愛するという人で、少し無茶な生活をしたため、若くして亡くなってしまいました。一方、私の父はもっとずっと規律正しい信心深さで、83歳で亡くなるまで、一生に一度もお酒を飲みませんでした。

私は、そういう家庭で育ちました。そうすると、私は半分日本人でもあるわけですが、普通の日本人とはまったく違う家庭環境に育ったわけです。では、普通のイスラーム教徒と同じ家庭環境かというと、それも少し違います。父は非常に信心深い人でしたが、同時にイスラームに対する知識が非常に深く、そのため、とてもリベラルな人でした。ガチガチに「あれをやってはだめ、これやってはだめ」と言う人ではありませんでした。たとえばクルアーン解釈などを、イスラームの主流派が考えているのと違う解釈をしてみようとしたり、そういうことを恐れない人でした。そして、私はきょうだいの中でも父と一番仲がよくて、父は「この子ならわかってくれるだろう」という感じで、そういうことを私に話して聞かせてくれました。

つまり、普通のイスラーム教徒の家庭とも少し違う環境でした。そういったことが、いまこうして皆さんとイスラームについてお話しするときに一種の土台になっているわけです。

「それってファシズムじゃないのか」

さて、レジュメを見ていただくと、「それってファシズムじゃないのか」というちょっと衝撃的なタイトルが付いています。これは、エジプトのウード奏者、ムスタファ・サイードさんの言葉です。弱冠28歳のウード奏者兼歌手兼作曲家兼音楽の先生です。彼は目が見えませんが、見事に楽器もコンピューターも使いこなして、世界中を飛び回って活動しています。

彼は日本で2010年12月に公演し、その後、今年（2011年）9月にも、「どうしても福島で避難所の方々に演奏したい」と言って自費でやって来ました。その

とき東京でも演奏会をしました。ペルシャの有名な詩人、ウマル・ハイヤーム（1048～1131年）の詩集『ルバイヤート』に自分自身で曲をつけたものも歌いました。こんな詩です。

「魂よ、謎を解くことはお前には出来ない。／さかしい知者の立場になることは出来ない。／せめては酒と盃でこの世に楽土をひらこう。／あの世でお前が楽土に行けるときまってはいない。」（小川亮作訳・岩波文庫版・第4歌）

「土を型に入れてつくられた身なのだ、／あらましの罪けがれは土から来たのだ。／これ以上よくなれとて出来ない相談だ、／自分をこんな風につくった主が悪いのだ。」（同・第30歌）

〈会場にサイード氏の演奏を流す〉

いまお聴きいただいたのは、「これ以上よくなれとて出来ない相談だ、／自分をこんな風につくった主が悪いのだ。」という部分です。

演奏後、質疑応答がありました。日本人の青年が手を挙げて、こんな質問をしました。「ルバイヤートを日本語訳で読むと、お酒を飲んでいる部分がすごく多かったりします。これは、とても反イスラーム的だと思います。それを、こうして歌うサイードさんは、あまり信心深いイスラーム教徒とはいえないのではないかと思いますが、どうでしょうか」

たしかに、『ルバイヤート』には〝来世のことなど心配しないで、とにかくお酒を飲んで楽しもうよ〟という詩がたくさんあります。いま挙げたところにも「せめては酒と盃でこの世に楽土をひらこう」とありますね。

青年の質問に対して、ムスタファ・サイードは「この詩は、お酒がどうのこうのという表面の裏に、もっともっと深い人間的な心の経験がそこにはあるんです。お酒うんぬんではありません」というふうに一生懸命に、ちょっといらつきながら（笑）説明しました。

その後、彼は私に「ファシズムが世界中に広がりつつあるが、日本にも届いているんだね」と言いました。

私は「確かにその質問はムスタファから見ると的外れだったかもしれないけれども、おそらく多くの日本

人が抱いてしまう疑問であって、ファシストとまで言わなくてもいいんじゃないの?」と思いました。それで、何でこういう言葉を使ったんだろうと私が考えた結果が、こういうことです。

まず、こういう詩を皆さんが読んでみて、イスラーム教徒が書いたり読んだりするべきではないのではないかというふうに、もしかしたら思われるかもしれません。

私もこの後、父が持っていた非常に古いアラビア語訳の『ルバイヤート』を引っ張り出して読んでみました。英語訳と日本語訳も読みましたが、それぞれ非常に違います。私はペルシャ語がわからないので、どれがどれぐらい近いのかはっきり言ってわかりませんが、まず英語に関しては、英訳（1859年）したエドワード・フィッツジェラルドという人は、あまりペルシャ語ができなかったのではないか、初歩的だったのではないかという説もあります。そうでなくても、英語で韻を踏むことに重点をおいて訳すので、意味よりもそっちのほうが大事になってくる面もあるわけです。アラビア語も韻律を守って書かなければいけないので、それに合わせて少し変えたりもしたかもしれません。日本語についてはペルシャ語から直接訳しているはずで、普通の口語で書いてあります。それぞれ非常に違います。ちょっと判断が難しいと思ったわけです。

どちらにしても、お酒を飲んだり、恋愛にふけったり、そして来世なんてわからないとか、あるいはその時代にたくさんいたスーフィー（神秘主義者）たちを、からかうような詩があります。つまり、たしかに信仰深い人が信仰を宣言したような詩でないわけです。

では、これがイスラーム教徒にとって、「私はムスリムだから、こんなものは読めない」という衝撃的なものなのか。私から見ると、決してそうではありません。

たとえば、ハイヤームという人は11世紀から12世紀の人ですが、イスラーム世界は彼より前に、アブー・ヌワース（756頃～814年頃）というアラビア語の詩人もすでに経験しています。イラクのバグダードで活躍した人ですが、同性愛者で、少年愛とか、お酒とか、主にそういったことを詩のテーマにしていた人です。

しかし、だからと言って処刑されたりはしていません。たしかに非常に無礼だということで何度も牢屋に入れられましたが、そのたびに釈放されています。そして、死が近づいてくると、アブー・ヌワースは少し改心して、詩の中でも「神様、私は天国に入れるような身分ではありません。でも、地獄の火に耐えられるような男でもありません」ということを書くわけです（笑）。

「盃は　昨日の悔いと明日の憂いを　晴らすもの、されば　この盃を傾けて　今日一日を楽しもう」（井田俊隆訳）。E・フィッツジェラルドの英訳本『ルバイヤート』第20歌の挿絵（エドマンド・サリバン画）

彼は8世紀から9世紀の人ですから、別にハイヤームが最初ではないわけです。ハイヤームの場合は、たとえばスーフィズムをバカにしたりする。もちろん、中には「こんなのはよくない」と思うイスラーム教徒もいるかもしれません。しかし、私がアラブ人の友だちに「いまこれ読んでいるの」と言うと、「ああ、いいねえ。ハイヤームはいいねえ」と言うんです。私の非常に信心深い父も、一生懸命これを読んでいたわけです。とても美しいアラビア語で訳してあります。

そうすると、普通のムスリムにとって、これはそんなにけしからんものではないわけです。日本語訳を書かれた方は、ハイヤームの思想を解説して、「神の観念の完全なる否定」とか「無神論的なイスラーム批判を含んでいる」という趣旨を書いていらっしゃいますが、私がアラビア語版を読んでいる限りでは、そうは感じません。

いま聴いていただいた、ムスタファが歌った部分は「これ以上よくなれとて出来ない相談だ、／自分をこんな風につくった主が悪いのだ」。アラビア語訳から和訳しますと「我が主よ、すべての生きる者と死す者を操る星の輝く空の主よ、私に欠陥があるとしても、あなたが私をつくったのだから、私に何の罪があるというんですか」と言っているわけです（笑）。

これは、無神論ではないですね。神を認めて語りかけて、文句を言っているわけです。ということは、神の存在を否定していないわけです。さらには、「神が自分をつくったのに、どうして自分が罰せられるんだろう」という疑念は、たとえ口にしなくても、ムスリムが一生に一度は考えることです。それを、こういう美しい詩で語っている。それを読まないほど、イスラーム教徒というのは心の狭い人たちではないんです。

たとえば、スーフィーは生涯のすべてを神に近づくことに捧げています。でも、はたから見ると、すごく自己満足にひたっているようにも見えて、「何だ、あいつら」と思う人もいたことでしょう。それを詩にすればやはり人は「うんうん」と、ちょっと、うなずきたくなるところもあるわけです。とどのつまりは、イスラーム教徒も普通の人間だということですね。

この詩も、ハイヤームが自分を卑下しながら、生きていても何のためかわからないし、死んだ後のこともわからない。だから、いま飲んで楽しんだほうがいいんだよという、何かペシミズムというか、言葉で表しにくい、日本語の「もののあわれ」みたいな世界に入っています。「もののあわれ」を外国語で説明するのが難しいように、ムスタファも説明するのが難しかった。「表面とはまったく違う側面、もっと深い人間的な経験なんだ」と言って、いらつくほど、どう説明していいかわからなかったのでしょう。

そして実際、いま、過激な一種狂信的なイスラームの信じ方をする人たちが出て来ていて、その人たちは、こういった詩を絶対に受け入れない。こういう詩をけしからんとする人たちがいるのも事実なのです。ムスタファとしては、「そういう人たちはファシズム的な考え方をする少数派のイスラーム教徒だ」と考えている

ので、その人たちと同じ目線でイスラームを見たその日本人の青年を、ファシズムという言葉で形容したのだろうと思います。

つまり、その青年はイスラーム教徒を理解するときに、イスラームという枠内で考えなければいけないと思っていたわけです。実は必ずしもそうではなくて、イスラーム教徒に接してその人を理解するに当たって、必ずしも「イスラーム」という枠内で考える必要はないのです。しかし、どうしても日本では、その枠内で理解しようとするわけです。ですから、青年がそういう質問をしてしまったのも、ある意味で、しかたのないことで、彼のせいではないと思います。

ジャスミン革命の詩は非イスラーム的？

ご承知の通り、去年（２０１０年）の12月から今年の1月にかけて、チュニジアで民主化運動がおこりました。「ジャスミン革命」と呼ばれています。この革命のシンボルとされている詩があります。アブルカースィム・シャーッビー（１９０９〜３４年）という25歳の若さで亡くなったチュニジアの詩人の詩です。

「いつの日か人々が生きることを望んだならば　運命は必ずやそれに応えるだろう／闇夜は明け、必ずや鎖は壊されるだろう／生きることへの情熱に抱かれなかった者は　空中でただ露となり消え失せるだろう／諸々の創造物たちとその隠れた魂が　そのように私に語りかけたのだ」

ジャスミン革命に加わった人々は、デモをしながら皆で声を合せて、この詩を口ずさんでいます。「いつの日か人々が生きることを望んだならば、運命は必ずやそれに応えるだろう」――とても有名な一節です。

このアブルカースィム・

チュニジアの30ディナール紙幣には、詩人シャーッビーの肖像が

シャーッビーという人は、9歳でクルアーンを暗記しました。お父さんはイスラーム法学者で判事でした。そのお父さんのもとで、イスラーム的な教育を受けました。外国語はできませんでした。20世紀のチュニジアですから、教育のある人は普通、フランス語ができました。彼はフランス語ができませんでしたが、翻訳ものには親しんでいたようで、「外国語ができればよかったな」と書いています。基本的にアラビア語で学び、アラブ・ロマン派の影響を強く受けた人です。彼は、チュニジアやアラブ世界の現状に対して、強い不満を抱いていました。「アラブ人はこれからもっと運命に立ち向かって、自分たちの国を変えていかなければならない」ということを、いろいろなところで書いていましたが、その思いがこの詩に結晶しているわけです。

さて、私がなぜこれを皆さんに紹介したかったかというと、この詩が「ジャスミン革命」成功の後に日本で紹介されたときに、日本の新聞で、ある学者の方がこんなふうに書かれていました。「イスラーム法学者の父を持ち、自らもその神学と法学を学んだ青年にして、この冒頭の言葉は驚くべきものである。宿命とは、イスラームにおいてはただアッラーの意志であり、人間が左右するものではないのだ」。そして「チュニジアは文明の多様性が生み出した国であり、7世紀にアラブ人によってイスラーム化されるが、この国のイスラームは文化の多様性を根底に秘めており、原理主義とは一線を画するものである。そうであるからこそ、クルアーンの教理を超越する詩人がこの国では国民的詩人とされてきた」という趣旨が書かれていました。

こういう見方は、イスラーム教徒にとっては違和感があります。まず、原理主義をイスラームの本流と見なし、コスモポリタンなチュニジアは、それとは一線を画するという見方ですが、そもそも原理主義といわれているものはイスラームの本流ではありませんから、それが本流で、チュニジアが外れているのだという見方は必ずしも正しくない。私が残念だったのは、「宿命とは、イスラームにおいてはただアッラーの意志であり、人間が左右するものではないから、これはクルアーンの教理を超越する詩である」という意見です。

実は、クルアーンにはこのような一説があります。「人々が自分で自分たちの状況を変えようとするまで、神は彼らの状況を変えることをしない」。変える必要があるなら自分でやれと言っているのです。「自分で変えようとしたら、その努力に神は応えるかもしれない」ということです。

ですから、シャーッビーは「クルアーンの教理を超越した詩人」ではないわけです。しかし、どうしても日本では、「イスラームというのは神に対する絶対服従の宗教である。したがって『人間は宿命を左右できない』という考え方をする」という固定概念があるようで、その枠内でイスラーム教徒を考えてしまう。一方、イスラーム教徒は「そうではない」ことを知っています。だから、シャーッビーの詩を読んだり聞いたりして「けしからん」などとは絶対に言わないわけで、反対に「その通りだ！」と思っているわけです。

クルアーンだけではなく「ハディース」つまり預言者ムハンマドの言行録にも、こんな話があります。預言者が別の人とある場所にラクダで行った。ラクダを降りてその場を離れるときに、もう一人の人はラクダをどこにもつながなかった。預言者は「ラクダをちゃんと木につないでから、後は神にまかせなさい」と言います。つながないでおいて神にまかせるのではだめですと教えているわけです。ですから、神にまかせて自分は何もしないという思想ではないのです。

演奏会で質問した青年も、このような日本のイスラーム観に接しているわけですね。そして、「イスラーム教徒に対しては、イスラームの光に照らし合わせて理解したり分析したりしなければいけない」と考えることが癖になってしまっているのでしょう。ですから、彼のせいではないのです。

皆さん、ブッシュ大統領に靴を投げつけた記者のことを覚えていらっしゃいますか（２００８年12月）。大統領がイラクを電撃訪問したときに、イラク人の新聞記者が靴を脱いで両方とも投げつけ、大統領は見事によけましたね、頭を下げて（笑）。このときに、日本の新聞には「イスラームにおいては靴を投げるということは最大級の侮辱と見なされる」と報じられました。で

も皆さん。一体、どこの宗教では「最大級の侮辱」と見なされないのでしょうか。世界中どこに行っても、人に靴を投げつけるのは相当無礼ですよね（笑）。イスラームが出る幕はないんです。たとえば、イスラームに「いいですか、靴を脱いで人に投げつけてはいけませんよ」なんて教えはありません。イスラームは関係ないわけです。

それがもっと顕著に表れたのが、イラクでの出来事で、このような笑い事ではありません。14歳の少女がアメリカ兵にレイプされて家族の前で殺されました。さらに、彼女の家族も殺されて、その遺体に火をつけたという事件がありました。そのときに、やはり日本の新聞はこのように書きました。「火葬を禁止するイスラームにおいて、遺体を焼くということは許されないから、イスラーム教徒は強く反発している」。しかし、そうでしょうか？　14歳の少女を家族の前でレイプして殺して、家族も殺した。そんな蛮行について、イスラーム教徒が気にしているのは、その遺体を焼いたかどうかなのでしょうか？　そんなことを彼らは怒っているのでしょうか？　つまり、この事件でイスラーム教徒あるいはイラク人がどれだけ怒っているかということを理解するのに「イスラーム」というファクターは必要でしょうか。必要はないです。

しかし、何につけてもイスラームが引き合いに出される。そうすると、読んでいるほうはその蓄積によって、「イスラーム教徒というのは、私たちとはかなり異質な人々だ」という考え方がどうしても出来上がってしまう。そうすると、最初の青年に戻りますが、やはりそれはメディアがつくり上げてしまった考え方だと言わざるを得ないのではないかと思います。つまり、イスラーム抜きでわかることを、わざわざイスラームに照らし合わせて考える必要はないということです。

イスラーム教徒といっても、個人によってまったく違います。２０１０年のミスＵＳＡは、レバノン出身のイスラーム教徒でした。アメリカ・ミシガン州のミスコンで優勝した後、ミス・アメリカになったわけです。ミスユニバースにも出場しましたが、彼女はラマダン中だから断食していたそうです。断食して、ビキ

ニ姿で皆の前を歩いたわけです。こういうことをしているから、では彼女はイスラームとはまったく離れているかというと、そうではありません。一人ひとり違うわけです。彼女がどういう人かを考えるときに、「どうして彼女はイスラーム教徒なのにこれをやったのか」と、わざわざ考えなくてもよいのだと私は思います。

サウジでも「私たちは運転するの」

イスラームの国の中で唯一、「女性は車を運転してはいけない」と定めている国があります。サウジアラビアですが、この国で「女性も運転したい」という運動が始まりました。今年になってから、若い女性たちが「アラブの春」に触発され、「フェイスブック」などのインターネットのソーシャルメディアを使って運動を始めたのです。そのひとりであるマナール・シャリーフという女性は、自分が運転している映像をネットで流しました。

その呼びかけの一部を訳してみました。

「神の平安があなた方の上にありますように。私の名前はマナール・シャリーフ。フェイスブックやツイッター、Eメールで皆さんからたくさんの質問が寄せられたので、まとめてお答えしようと、このビデオを作製することにしました……。私たちに賛同してくれる人々も、反対派もいると思います。でも、ネット上で偽名の後ろに隠れて、乱暴な言葉で攻撃することはもうやめてくださいね。隠れてはいても、神様は見ていますからね……。今回のことは、皆さんの意識の高さやアラブ人らしい雄々しさを世界に証明するチャンスです。きちんとした服装で交通ルールも守る私たち女性、つまり皆さんの奥さんや妹さんやお母さんが車を運転するのがどうしてあなた方はそんなに嫌なのか、もう一度よく考えてみてください……。最後に一言だけ。早い話がね、私たちは運転するの」

この最後の部分の彼女の熱意。同時に、決して激するでもなく、冷静に、かわいく自分の主張を押し通そうとしているところが印象的です。「早い話がね、私たちは運転するの」と訳しましたが、それもあまり正確ではなくて、どちらかというと「私たちは運転するの、

それだけの話」というふうに終わっています。

これは、NHKのニュース番組でも特集として放送されました。それは、「アラブの女性たちが反乱する」というようなタイトルでした。実際には、サウジアラビアの女性たちですね。サウジでは、国の最高権威とされているイスラーム法学者が「ファトワー」といわれる勧告を出して、「女性の運転はイスラームにおいては許されない」と言ったので女性は運転できないことになったわけです。アブドル=アズィーズ・ビン・バーズという人ですが、もう亡くなっています。

その子息であるイスラーム学者のアハマド・ビン・バーズという人は、何年か前に「女性も運転する権利がある」と、お父さんとは違う意見を出しています。「父の時代はそういうふうに考えたかもしれない。父も、よかれと思ってやったことでしょう。もちろん、私は『女性は運転するべきだ』と言っているわけではありません。ただ『運転する権利はある』ということです」。つまり、彼女たちが運転できないという宗教的な根拠はないけれども、自分の心情としては運転してほしくないということです。つまり、サウジアラビアの伝統とか習慣とかに鑑みて、女性が運転できれば勝手に出かけて行くし、男に会おうと思えば会えるしというふうに考えるわけです。そうすると女性をコントロールできなくなるから、女性には運転させないほうがいいという考え方です。

しかし、実際は、イスラームの歴史をひもといてみると、預言者ムハンマドの妻のアーイシャという人は、預言者の死後に勃発した「ラクダの戦い」という戦争で、自らラクダに乗って軍を指揮しています。当時の代表的な乗り物であったラクダを女性が自分で操っていたのだから、いま車を操れない理由はまったくないわけです。

それでも、運転を禁じた一部の法学者の考え方では「女性が車を運転していいという根拠はイスラームにないから」だめだという。その一方で、「男性が運転してはいけないという文言はないから」男性はやっていい。つまり、ダブルスタンダードです。しかし、ビン・バーズ氏の子息も認めているように、女性も同じ権利があ

ります。だって、車の運転のことは男性についても女性についても何の言及もないわけですから。

そういうサウジアラビアですが、あのビデオを流した彼女は、こうした議論にはまったく触れないで「私たちは、きちんとベールもかぶり、交通のルールも守っています。では、どうしてあなたが女性の運転をそんなに嫌なのか考えてみましょうね」という、非常に利口な言い方をしています。「あなたのアラブ的な男らしさを見せてちょうだい」という利口な切り口で主張しているわけです。かわいいし、どうしても応援したくなる感じの女性です。

クルアーンは男尊女卑か

ここでちょっと触れたかったのが、イスラームが男尊女卑であるという考え方の根拠になっているクルアーンの文言についてです。問題の「女性の章」、クルアーンの第4章ですが、その34節を自分で訳してみました。

「男たちは女たちの擁護者である、神が彼らの一部の者に与えた優位によって、そして彼らが費やす財産によって……あなた方が彼女たちの不行跡を恐れたならば、彼女たちを諭(さと)し、床を共にせず、叩きなさい」

同じ個所の岩波文庫の訳はこうです。

「アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男の方が女の上に立つべきもの……反抗的になりそうな心配のある女はよく諭し、（それでも駄目なら）寝床に追いやって（こらしめ、それも効がない場合は）打擲(ちょうちゃく)を加えるもよい」

違いは、一目瞭然だと思います。

男たちは女たちの「擁護者である」というのを、アラビア語では「カウワームーン」と表現します。もともとは「立っている」という意味です。カウワームーン・アラ、アラは「上」の意味です。直訳すると「男は女の上に立っている」になります。しかし、この語は、何かの面倒を見るとか、奉仕するの意味で使われます。たとえば、対象がモスクであれば、モスクの掃除をしたり、鍵をしめたりとか、そういうことをやる人を、

そのモスクのカウワームーン・アラと、アラビア語ではいいます。それで「男性は女性の上に立っている」という文を「擁護者である」と訳したわけです。

次の「神が彼らの一部のものに与えた優位によって」という部分ですが、「彼ら」というのは男たちです。男たちに神は優劣をつけた。つまり、能力は一人ひとり違う。しかし、その一人ひとり違う能力の範囲内で、男性は女性を養わなければいけない。それを具体的に説明したのが「そして彼らが費やす財産によって」というところです。この「彼ら」も、もちろん男性です。イスラームでは、男たちは女たちを金銭的に養わなければいけない。たとえ女性に自分の財産があっても、男性はそれに手を出せない。女性が父から遺産を相続しても、それは全部彼女のものです。彼女の食費や何かは、すべて男がもたなければいけないということです。

ひとつづきの文で、最初の「男たちは女たちの擁護者である」の主語が「男たち」であり、3番目の「彼らが費やす財産によって」の「彼ら」も男たちですから、2番目の「神が彼らの一部の者に与えた優位によって」の「彼ら」も「男たち」なのです。「男と女」ではありません。男は女よりまさっているという意味ではまったくないわけです。ところが岩波文庫の訳は「もともと男と（女）の間には優劣をおつけになったのだし」としています。

次の箇所も問題です。「あなた方が彼女たちの不行跡を恐れたならば、彼女たちを諭し、床を共にせず、叩きなさい」。この一説はよく「クルアーンには、夫は妻を殴っていいと書いてある」というふうに読まれます。

この「不行跡」の意味については、預言者ムハンマドが「ハディース（言行録）」の最後のお説教で、述べています。「もし、あなた方の妻が、あなた方が嫌うような者を自分の床に招き入れ」。つまり、兄でも父親でもない男を、妻が床に招き入れるようなことがあったらということです。そんなことがあったら、どうするか。クルアーンのこの部分では、まず「諭しなさい」と。本当だったら、自分の寝室に男を入れるなんてことをしたら、普通この時代のアラブ人の感覚では、男が逆

上して妻を殺してもだれも驚かないような状況です。しかし、ムハンマドは、まず「そんなことはやらないでくれ」と諭しなさいと言います。それでもまだやったら、「もう君とは床を共にしない」と言いなさい。それでもまだやったら、「痛くない程度に叩きなさい」。

はたして、これは「夫は妻を殴ってよい」という意味でしょうか。違います。「たとえ、あなたの妻がここまでやったとしても、あなたができるのはここまでです」という警告です。これがどうしても読み違えられてしまって、「イスラームは男尊女卑の宗教である」と解釈されてしまう。

実際には、クルアーンには「女たちは男たちの仲間であり、善行を勧め、悪を戒めるにおいて、義務と同じだけの権利をもつ」というふうに書いてあります。「善行を勧め、悪を戒める」とは、社会の秩序を守るということです。それにおいて、男と女が対等の仲間である。つまり、家庭だけではなくて、社会でも、女は男のパートナーである。クルアーンにも、またハディースにも、こういったものがあるわけです。

さて、先ほどの文言を「たとえ妻がここまでやったとしても、夫ができることはこれだけだ」と解釈することについては皆の意見が一致したとして、問題は次の段階です。これを「女性の権利は、最大限ここまでだ」と取るか。それとも「女性の権利は、最低限これだ」と解釈するか、です。

実際、あの時代において、預言者の教えは革命的なフェニミズムだったと思います。いまは、時代がもっと変わっています。ですから、これを１４００年前に説かれた最低限の女性の権利とするならば、それをさらに拡大していくのが、預言者ムハンマドの、あるいはクルアーンの精神にもかなっている。そう考えることが合理的なわけです。

預言者ムハンマド自身が、人々にこう言っています。「私は人間です。信仰に関わることについては、私が何かを命じたら、あなた方は従いなさい。しかし、俗世のことについて私が何か言っても、従わなくてよい。俗世のことについては、あなた方のほうがよくわかっているのだから」というふうに、同時代の人に言って

いるのです。それなのに実際には、イスラーム世界のほとんどで、女性の権利については非常に遅れているわけです。

一方で、たとえば、前のエジプトのムフティー（最高イスラム法官）、つまり宗教的最高権威ですが、彼は「女性が大統領になることに宗教的な障害は一切ない」と宣言しています。ただ、そういうことは日本では紹介されません。

結論を言うと「イスラームが男尊女卑の宗教であるというのは間違っている」ということです。男女平等というクルアーンの原理原則に、現実が追いついていないというのが実際のところです。そうすると、女性を虐げるような思想をもっている人たちを日本のメディアで「原理主義者」と呼ぶことは、そもそも間違いで、それはイスラームの原理ではないわけです。

私は、たとえばメディア関係者などにいつも言っていますが、「イスラーム教徒ではない人に、正しいイスラームを知ってほしいとは思っていません。私が知ってほしいのは、イスラームを知らないということです。『自分はイスラームを知らない』ということだけわかってくれればいいのです」と。

たとえば、メディアにおいて「原理主義」のような言葉を使うときに、「いや、自分はイスラームを知らないのだから、これを原理主義と呼んでいいのだろうか？」というふうに自問していただければ、それで十分だと思います。

2　クルアーンとイスラームの音楽性

では、イスラームとは何か。イスラームを知っている・知らないの「イスラーム」というのは何でしょうか。その答え自体が、イスラーム教徒と非イスラーム教徒では違います。

たとえば、日本では学者にせよ、メディアにせよ、「イスラーム」というときに、イスラーム教徒の生活とかがすべて含まれてくることが多いわけです。地域性だとか、そういうものを全部ひっくるめて「イスラーム」として研究対象にします。

イスラームとは「クルアーンとハディース」

一方、イスラーム教徒にとってのイスラームは何かというと、クルアーンとハディースです。クルアーンというのは神の言葉で、ハディースというのは預言者ムハンマドの言行を記録したものです。これが「イスラーム」なのです。

これをもとに、その時代、その時代に合わせて、具体的な規定・規範を組み上げていくのが「イスラーム法」です。これは、イスラーム法学者がやってきたことです。つまり、人間がやった仕事ですから、本来だったら批判と革新の対象になります。実際に、最初はそうでした。それが、中世のある時点を境にやられなくなった。もう十分やったから、これ以上いじったら大変なことになるかもしれないと言い出して、改革をやめてしまいました。これが、イスラーム史における最大の過ちでした。

そうすると、イスラームには「人間の仕事としての部分」と、それから「絶対に手を加えられない部分」がある。さらには普通の人たちの普通の生活があって、もしかするとそれはクルアーンとは相いれないかもしれない。それでも、研究対象としては「すべてイスラーム」とされてしまう。しかし、イスラーム教徒から見ると、それは違うわけです。

では、本当のイスラームとは何だろうと考えたときに、どうしても戻る先はクルアーンとハディースということになります。おおもとは、もちろんクルアーンです。それで、「クルアーンこそがイスラームの原点である」と聞いて、それを読む。では「クルアーンを読めば、イスラームがわかるのか」という点について、ちょっと考えてみたいと思います。

これからお聞きいただくのは、最初にお話しした私の伯父の朗唱で非常に古いものですが、アラブ世界では、いまでもラジオやテレビなどで少し聞くことができます。大天使ガブリエルが、マリアに処女懐胎を告げるという「受胎告知」のシーンです。

〈録音を流す〉

ほんの最初の部分だけ聞いていただきましたが、ク

ルアーンというのは本来、このように声に出して詠み上げるものです。「クルアーン」というのは「カラア」つまり「読む、（声に出して）詠む」という動詞から来たものです。

クルアーンは、イスラーム教徒にとっては神の言葉であり、一言も変えることは許されません。アラビア語の文法も、この不変のクルアーンをもとに成文化されているために、クルアーン以降は基本的に変わっていません。というわけで、アラビア語ができれば、1500年前、1600年前の古典でも現代語訳なしで読めるという、そういう利点があるので、皆さんも頑張ってアラビア語を勉強してみてください（笑）。

クルアーンはイスラーム教徒にとって神の言葉です。フランスのイスラーム学者のルイ・マシニョン（1883～1962年）という人が「イスラーム教徒にとってのクルアーンとは、キリスト教徒にとっての聖書ではなくキリストである」と言っています。こよなく神聖なものです。長崎のキリシタンが、キリストが描かれた「踏絵」を踏むよりは磔（はりつけ）になることを選んだことを考えてみてください。

こういう事件がありましたね。キューバのグアンタナモ米軍基地で、アメリカの兵隊が囚人をいじめ、トイレにクルアーンを流したという。こういう行為に、イスラーム世界はものすごく反発するわけです。クルアーンに書かれているのは、神の言葉であり、イスラーム教徒にとって、まさしく信仰の原点であり、生活の規律に関すること、信仰に関することがすべて書かれているものである。そして、神と言葉を共有することによって、神とつながるためのものである。そういう神聖なものだからです。

ちなみに、クルアーンというのはそこに書いてある言葉であって、その本自体ではありません。本自体は「ムスハフ」といいます。本は、神の言葉をつづった紙とインクですね。それでも神の言葉を記したものですから、とても大切に扱います。

「言葉の美しさ」で広まった

さて、イスラームが広がった背景には、クルアーン

の言葉の美しさがあったといわれています。最初にムハンマドが布教を始めたときは非常に大きな反発にあい、迫害されて石を投げられたり、暗殺計画が幾つもあったりということがありました。しかし、次第にイスラームが広まっていった。それは、クルアーンを聞いた人々が、その言葉の美しさに心を打たれて改宗していったのもその一因だとされています。

アラブ世界は、いまでもそうですが、その時代も、詩人が最も尊敬される社会でした。そして、クルアーンは、どれだけすごい詩人がかかっても、とてもかなわないというアラビア語だったわけです。たとえば、映画「十戒」の世界を思い浮かべてください。エジプトのファラオの宮廷で魔術師たちが幅をきかせている時代に、その魔術師たちがかなわないマジックを披露することによって、モーゼが神の存在を証明します。最後のマジックは、紅海を真っぷたつに割るという奇跡です。この「モーゼの奇跡」のイスラーム版が「クルアーン」です。クルアーンの一節一節のことを「アーヤ」と言います。「証（あかし）」「しるし」という意味です。一節一節、一句一句が言葉の形をした奇跡であり、神の存在の証（アーヤ）なのです。

ですから、これは基本的に模倣不可能で、翻訳も不可能とされています。翻訳したものはクルアーンではなく、クルアーンの注釈であり注解です。しかし、そうすると外国人がクルアーンを正しく読むというのはとても難しいという不都合がたしかにあるわけです。

クルアーンの「凝結（アラク）の章」（第96章）を見てみたいと思います（全19節）。これは、大天使ガブリエルを通して、ムハンマドに最初に伝えられた啓示だといわれています。ムハンマドは、その時代のアラブの乱れた社会を嫌って、砂漠の洞穴にこもって瞑想をしていました。そこに大天使が現れて、最初に言った言葉は「詠みなさい」でした。ムハンマドという人は、実は字が読めなかったんです。それで「私は詠めません」と言ったら、もう一度「詠みなさい」「私は詠めません」。3回目に「詠みなさい、創造主であるあなたの主の御名において」と大天使が言った。これが最初の啓示です。次のような言葉です。

（1）詠みなさい、創造主であるあなたの主の御名において
（2）一つの凝血から人間を創造した
（3）詠みなさい、あなたの主はもっとも高貴であり
（4）その主は筆によって教えた
（5）人間が知らなかったことを教えた

2行目の「一つの凝血から人間を創造した」、この「凝血」は日本語にはこの訳しかなく、漢字の字面からは、おどろおどろしい印象さえ受けます。アラビア語はもっと神秘的な響きのある言葉で「アラク」です。何か、人間の根源みたいなものが感じられます。

4行目に「その主は筆によって教えた」。砂漠ですから、字は石に刻んだりしていた時代です。そこに「筆によって」というのは、まさしく「いまから始まろうとしているのが新しい宗教である」というだけではなくて「新しい文明が誕生するのだ」ということを暗示するような、そういう最初の啓示です。

5行目に「人間が知らなかったことを教えた」。つまり、ある意味でその後のイスラーム世界の学術的繁栄の基礎となるような啓示でもあると思います。

この第5節までが最初の啓示です。

最初の（1）を朗読してみます。「イクラッビスミラッビカッラズィーハラク」。「詠みなさい」は「イクラッ！」です。非常にシャープで強い音です。そして、この行の最後の「ハラク」の音は、のどの奥から出す「クッ」という、とても強い音です。最初の「イクラッ！」の勢いが消えないまま、この行が終わるわけで、もしこの強い音でなければ、ちょっと尻つぼみになりかねない文章です。（2）は「ハラカルインサーナミンアラク」。（1）を解説するかのように、同じ脚韻になっています。

続く3節目からは、少し音調が柔らかくなり、脚韻も変わります。アラブの詩は、何行続いても、何百行続いても、脚韻は同じ、一節一節の長さも同じという原則があります。クルアーンは、それを、しょっぱなから無視しています。脚韻は「3～5節」「6～14節」

「15〜18節」の各ブロックごとに変わっていきます。

6節目以降は話題が変わっています。5と6の間には少し時間がたっています。6以下の啓示を受けたときは、ムハンマドはすでに布教を始めています。

（6）否、人間とは真に反逆的であり
（7）助けなど必要としないと信じている
（8）すべてはあなたの主に帰するのである
（9）あなたは見たか、止めようとする者を
（10）一人のしもべが祈りを捧げる時に
（11）あなたはその者が正しい道にあると見たか
（12）または敬神を勧めていると
（13）あなたは彼が（神の言葉を）嘘だと言い、背を向けるのを見たか
（14）神が見ているということを、その者は知らなかったか

このとき、ムハンマドは布教を始めていて、迫害されています。そんなムハンマドに対して、大丈夫だと慰め、励ますような語調になります。（6）は「カッラーインナルインサーナラヤトゥガー」。「アー」というとても柔らかい脚韻に変わっています。迫害されて、ちょっとくじけそうになっているムハンマドを慰めるような音律です。そして（14）まで9節にわたって、「アー」という柔らかい脚韻が続きます。

（15）否、もし彼がそれを止めないならば、我は彼をその前髪から捕らえるだろう
（16）偽り深く罪深い前髪から
（17）彼は仲間を呼ぶが良い
（18）我は火獄の番人を呼ぶであろう

（15）の「もし彼がそれを止めないならば」、ある意味で脅迫です。〝こういう恐ろしい罰が待っているぞ〟と。すごく強い言葉です。朗読すると「カッラーラインラムヤンタヒラナスファアンビンナースィヤ」。鋭く、厳しい音の連なりです。そして（18）まで、脚韻は「ナースィヤ」「ハーティア」「ナーディヤ」「ザバーニヤ」と、

強い音が畳みかけるように重なっていき、緊張感と畏れが増していきます。

(19) 否、彼に従ってはならない。額ずき、(神に) 近づきなさい

そして、これまで短い文章が続いていたのが、最後の行で突然長くなります。「カッラー(否)」という硬い言葉で始まりますが、直前まで非常に強い言葉が続いたので、今度はこの「カッラー」が柔らかく感じられます。ほっとさせる感じです。「額づき、(神に) 近づきなさい」——近づいていいんだよと。直前まで続いていた緊張感がほぐれて、ソフトランディングして終わるという構造になっています。

言葉の美意識に大きな違いが

これはほんの一例ですが、クルアーンをアラブ人が聞いたとき、文章が非常に簡潔でシャープです。歯切れがよくて、リズミカルです。そこに格調の高さと美と神々しさを感じるわけなのです。しかし、この部分の日本語の訳は、それが反映されているとは、ちょっと思えません。

「これ、どう思う、(神の) 僕が祈っていると、それを邪魔する者がある。これ、どう思う、あれで正しい道を踏んでおるか、懼神をひとに勧めておるか。これ、どう思う、それとも嘘だと言うて背を向けたか。アッラーが見ていらっしゃるのを知らないか。いや、いや、もしさっさと止めなければ、前髪ぐっと捉えるぞ、あの嘘つきで罪ふかい額の髪を捉えるぞ。いくらでも己れの手下を喚ぶがよい。こちらは地獄掛りを喚んでやる。いけない、いけない、あんな男の言うこと聞くな。さ、額ずいて、近う寄れ」

これは岩波文庫の訳ですが、たとえば「これ(、どう思う)」とか、「さ、」といった部分は、もともとアラビア語原典にはない言葉をわざわざ付け加えて、こういう雰囲気を作り出したものです。訳されたのは文献学でも非常に高名な先生で、世界的な大権威の方ですし、もちろんアラビア語がとてもよくおできになった方で

す。いろいろ調査もなさった上で訳していらっしゃると思います。ですから、私はこれを否定するつもりはまったくございません。ただ、アラビア語のネイティブとして、そして子どものときからクルアーンを学校でも家庭でも学んできた者として、ちょっと違うのではないかなと感じる部分があるということです。

では、どうしてこういう訳し方になったのかと考えると、アラブ人が格調高いと感じるあの歯切れのよい簡潔なシャープな音の連なりが、日本語における格調美とか優雅さとか雅（みやび）とかの感覚と相いれないからではないか。日本語の美意識というのは、もっと、まったりとした、短歌を詠み上げる調べのようなものが優雅であり優美なわけです。歯切れのよさというのは、むしろ江戸っ子のべらんめえ口調とか、そういう庶民的な響きに聞こえるのですね。だから、その口調で訳すと、クルアーンの格調の高さがなかなか伝わらない。そういうことではないかと思います。

ですから、このセクションの結論を言いますと、皆さんが「そうか、イスラームの原点はクルアーンなんだな。よし、クルアーンを読もう」と思っても、なかなか難しい。「どうして、これを神の言葉と見なしているのか」が感じられるには、かなり想像力を働かせないと難しいということです。もし英語やフランス語をお読みになる方がいたら、そちらのほうが原文に近い雰囲気で訳されているといえるかもしれません。

「音楽はもっとも崇高な芸術」

さて次に、ナスィール・シャンマというイラク生まれのウード奏者の演奏を聴いていただきたいと思います。

〈演奏を流す〉

これが、現在も受け継がれているアラブの古典音楽です。とくに、このナスィール・シャンマは現在のイラク楽派を代表する名手で、日本にも演奏旅行で来ています。最初にお話ししたムスタファ君を小さいときに引き取って演奏家に育て上げたのも、この人です。

音楽というと、何となく非イスラーム的な、イスラーム原理主義と呼ばれている人たち、つまり厳格主義者

の人たちが「けしからん」というのではないかというイメージがあると思います。たしかに、アフガニスタンのタリバン政権は音楽を禁止していました。

では、実際にはどうなのかというと、イスラーム時代、学問の分業が起こる前の、哲学や医学などさまざまな学問を一人の人がやっていた時代の大学匠であるファーラービーやキンディー（9世紀）といった人たちが、音楽についていろいろ書いています。

たとえば、9世紀から10世紀の人であるファーラービーという学者は「リズムは自然の美しさを増幅する」と書いています。また宗教学者のガザーリーは11世紀から12世紀にかけての人ですが、『宗教諸学の再生』という本の中で「聴くことと、感じることの作法」というふうに題をつけて、「音楽は心を清らかにする。クルアーンやハディースには音楽を禁止する文言はない」と断言しています。

また、14世紀から15世紀に生きた、ヨーロッパでは「世界最初の社会学者」といわれているイブン・ハルドゥーンという人は「音楽はもっとも崇高な芸術であり、社会が弱体化する時、真っ先に衰退するもの」と書いています。

音楽は「非イスラーム的」どころか、反対に、この上なく讃えられているわけです。

アラブ音楽の基礎ができたのは、アッバース朝時代（750～1258年）の初期、つまり8世紀の終わりから9世紀の初めといわれています。イスラーム時代の初期です。それまではどうだったかというと、アラブ人は基本的に砂漠の遊牧民ですから、原始的なとても素朴な歌しかもっていませんでした。アラブ人にとって、完成された芸術は「詩」だけでした。詩は、イスラーム以前にすでに完成されていました。でも、それだけでした。イスラームが起こって、急激に広がり、アラブ人が周辺の人々、たとえばペルシャ人やローマ帝国の人々、つまり、それまでのアラブよりもずっと洗練された文化をもっている人々と交流していくなかで、みずからの音楽も発展させていったわけです。

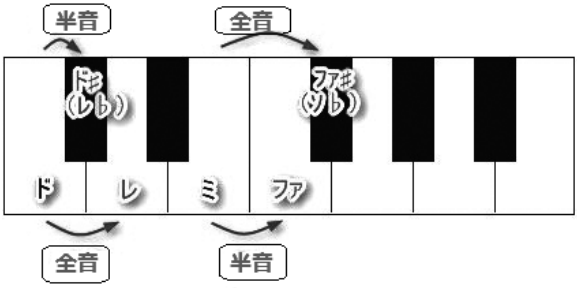
とくに、元ペルシャ帝国の人々やローマ帝国の人々がアラビア半島に入ってくると、彼らは高度な文化を

もっています。なかには、人の家庭で使用人として働いたり、カーバ神殿のモスクを建てる工事現場で働いたり、そういう人たちもいたでしょう。彼らは、よく歌いながら働いていました。モスクを建てる現場で歌っていて、それをだめだと言った統治者がいたということはまったく記録されていません。

そういった人々の音楽を聴いて、アラブ人は自分たちがそれまで育ててきた「詩」を歌うのに適した音楽を発展させていきます。こうやって、イスラーム時代になって最初にアラブ人が完成させた芸術が「音楽」でした。しかも、イスラーム時代の最初の100年かそこらで、ほぼいま伝わっている形で完成させたのです。

「複雑なリズム」「細かく分けた音」

先ほど、ちょっと聴いていただいたわけですが、アラブの音楽を特徴づけるものは何かということを、ほんの少しだけ言いますと、まずひとつはリズムです。リズムが複雑だということです。アラブ音楽は基本的に単旋律です。ですから、リズムは複雑でいいわけです。たとえば、3拍子、2拍子、2拍子、3拍子で進んでいくとか、非常に複雑になっています。イスラーム教徒が多い中国の新疆・ウイグル自治区の音楽を聴いたとき、やはりアラブの基本的なリズムと同様で、とても印象的でした。



一方、西洋音楽はハーモニーの音楽です。ハーモニーという理論に基づいて、あれだけ洗練され、発展していったわけです。ハーモニーを発展させるには、リズムは単調でなくてはできません。ということで、西洋音楽は「1、2、3、4、1、2、3、4」、あるいは「1、2、3、1、2、3」とい

う単純なリズムが基本です。

それからもうひとつ、いまこの音楽を聴いて気がついた方はいらっしゃるでしょうか。西洋音楽の音階では、たとえば、ドレミファの「ド」から「レ」は全音です。「ド」から「ドの♯（シャープ）」までが、その半分の半音です。ピアノの鍵盤でいえば、「ド」の白鍵（白い鍵盤）からすぐ右隣の黒鍵（黒い鍵盤）までですね。この半音が、西洋音楽においてはもっとも小さな単位のわけです、基本的には。

ところが、アラブ音楽では、この全音を9つに分けます。これを微分音といいます。つまり、「ド」と「レ」間に9個、音があるのです。これを歌うとなると、かなり難しくなりますが。

先ほどのナスィール・シャンマは「バッハがあれほどまでに平均律（1オクターヴなど一定の音程を均等に分割した音律）を完成させなければ、西洋音楽はもっと発展していたかもしれない」と言っています。つまり、アラブ人にとっては、音が少なすぎて単調に聞こえるわけです。しかも、リズムも単調なわけですね。そういうことがあって、アラブ人の中には西洋音楽というのはどうもつまらないという人もいるわけです。

本当はこの音楽について、もう少し、お話しするつもりでしたが、時間が来てしまいました。唐突になりましたが、これで一応私のお話は終わりにさせていただきます。

【会場からの質問】 クルアーンの原文を朗読していただき、意味はわからなくても、ひとつの音楽のように感じました。人間は、どこの文明の音楽であっても、言葉がわからなくても、何かを感じ取れるものだと思います。そこに「音楽がもつ神聖さ」があるのではないかと思います。そこで、イスラームの方々が「クルアーンは神の言葉」と受けとめる上で、音楽の神聖さといったものをどのように感じ取っておられるのか。そこをお聞きしたいのですが。

【講師】 クルアーンを詠み上げると、たしかに非常に音楽的です。でも、アラブ人は、イスラーム以前から、もともと音楽的なリズムの詩をもっていたわけです。

言葉が音楽的であるという文化であるわけです。ですから、クルアーンの言葉が音楽的であるから「だから音楽は神聖だ」とはならないで、むしろ「だから言葉が神聖だ」という考え方になります。

したがって、クルアーンは神の言葉であり、もっとも神聖なものですが、たとえクルアーンの言葉ではなくても、言葉というもの自体が神聖であり、それを書いた本は決して乱暴に扱ってはいけないという考え方をします。それこそ英語の絵本であっても、踏んづけたり、破ったり、そういうことはしてはいけない、言葉は神聖である。そう考えます。

ですから、先ほど、「詩」の次にアラブ人が完成させた芸術は「音楽」だと申し上げましたが、その次に完成させたのが「書道」です。西洋では、キリストにまつわるさまざまなエピソードをより美しく描くために絵画が発展したように、アラブ世界では「神の言葉」をより美しく書くために書道が発展した。そういう歴史にもつながっていきます。

（Karima Morooka Elsanny ／ＮＨＫラジオ日本アナウンサー、慶應義塾大学非常勤講師）

（本稿は２０１１年10月12日、東京新宿区の日本青年館で行われた講演をまとめたものです）